

Title	史実と虚構の融合と分離 マンゾーニの歴史小説I promessi sposiにおける語りの技法 (Abstract_要旨)
Author(s)	霜田, 洋祐
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19422
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	霜田 洋祐
論文題目	史実と虚構の融合と分離 —マンゾーニの歴史小説 <i>I promessi sposi</i> における語りの技法—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は近代イタリア文学を代表する作家アレッサンドロ・マンゾーニの歴史小説 <i>I promessi sposi</i> を研究対象とし、事実とフィクションの接合という作品の根幹にかかわる問題を、主に「語り」の技法の観点から分析したものであり、全体の導入部としての第1章と、テキストを具体的に分析した第2章以降の全6章からなる。</p> <p>第1章では、対象作品の概略を述べたうえで、この作品が近代小説として、また歴史小説としてイタリア文学史およびヨーロッパ文学史の中でどのように位置づけられているかを確認し、同時に作品形成に強い影響を与えたマンゾーニの詩学の一端を紹介する。こうして本論文の各章を互いに関連づけることになる諸前提・諸問題を整理したうえで、作品の研究史における本研究の位置づけが明確にされている。</p> <p>第2章では、フィクションを「事実の報告」として語るための口実である「匿名の手稿」を取り上げ、語り手がこの手稿に頻繁に言及することの意味を追求する。語り手は、実在の史料に加えて、自分が発見したという「匿名の手稿」を典拠に物語を綴っていく。語り手による言及に基いて各場面の出拠を整理し、これをテキスト外の情報（史実）と照合すると、虚実が入り混じる箇所においては創作部分のみが常に匿名手稿の記述内容に帰されていることが明らかとなる。つまり、読者は匿名の手稿を目印にすることにより史実と虚構を見分けることができる仕組みになっているのである。また、匿名手稿と創作部分が逐一对応するこのような構造は、小説の第一草稿においては未だ見られず、出版稿への推敲を通じて整えられた点も注目に値する。</p> <p>第3章で分析の対象となるのは、しきりに典拠に言及し、かつ物語にコメントし、「読者」への呼び掛けをも行う「語り手」である。彼は一人称複数「我々」を多用するのであるが、語り手が用いる一人称には単数「私」と複数「我々」の二種類がある。従来の研究は、語り手がこれら単複の一人称に対応する二つの相貌を持つとしたうえで、「我々」については、これが「著者の一人称複数」と呼ばれる語り手一人を指す用法であると見なしていたように見受けられる。しかし、「我々」の使用例を詳細に観察すると、その中には「著者の一人称複数」とは別の用法、すなわち「聞き手」としての読者を含む本当の複数（「共感の一人称複数」）が数多く含まれていることが確認できる。これを踏まえて語り手が用いる一人称を全てチェックすると、「著者の一人称複数」の使用が歴史叙述部分に偏在していることが分かる。すなわち、フィクションと歴史叙述においてはそれぞれ異なるレトリックが用いられているのである。</p>			

一方、第4章は、従来その存在が無視されていた「共感の一人称複数」をも考慮に入れつつ、テキストに織り込まれた「読者」像を考察の対象とする。マンゾーニは「25人の読者」という不特定“少数”の「聞き手」をテキスト内部に設定しているが、彼が近代特有の読書方法を強く意識していたことは、作品中、随所に見られるこれら「聞き手」への呼びかけが呼格ではなく二人称複数の人称代名詞を用いる等の方法によく表れており、それはイタリア初の近代小説と評価されるに相応しいものである。しかし、こうした呼びかけのあまりに高い“頻度”に着目するとき、この小説が同時代の欧州諸国の一般的な「近代小説」のあり方から一線を画す特異な作品であることが見えてくる。呼びかけが頻繁に過ぎれば読者は物語世界への没入を妨げられる恐れが生じるのであるが、物語展開から得られる楽しみよりも、読者はむしろ「事実」を見極めることに喜びを見出すべきだというのがマンゾーニの考えだったのである。

第5章は、フィクションとの混合を避けるよう工夫された「歴史叙述的部分」について表現上の特徴を分析するとともに、これを単独で見た場合の「歴史叙述らしさ」を検証する。歴史書の文体には、事実を述べるというスタンスに由来するいくつかの形式的特徴があるが、この作品の歴史叙述部分は、このような観点からすると、かなりの程度「歴史叙述」の特徴を備えている。特にペスト禍を扱った章は本物の歴史書と比べても遜色ない叙述がなされており、特に史料「引用」の技法を分析すると、それが、文飾や単なる情報源の提示のためではなく、叙述に実在感を与えるために参照されていることが確認できる。一方、創作部分を見ると、小説の枠内においては等しく「事実の報告」であるはずなのに「歴史叙述」の文体的特徴が減少しており、匿名手稿を参照するに当たっても効果的な引用技法が駆使されることはない。こうした意味における「歴史叙述らしさ」に関しても、創作部分と歴史部分の間には明瞭な差が認められる。

第6章は、巧みに棲み分けが行われている創作部分と歴史叙述が、いずれも社会の全てを描くことを目指して既存の現実描写の方法を刷新するものであったことに注目する。主人公を敢えて下層階級から選び出し、彼らの運命にあらゆる階層の人々を関わらせていく *I promessi sposi* のあり方は、様式の区分に関する古典主義の規則を解体するものであったという意味で「反文学」的と言える。同様の指向性は歴史記述においても観察され、為政者たちを卑近な現実のレベルに引き落とす一方、飢饉やペストといった人間社会の総体に関わる事件を描こうとする点で、いわば「反歴史」的傾向の表れであった。こうした「反文学」「反歴史」的な精神が、文体や表現技法のレベルにまで浸透していることを確かめることにより、社会的・歴史的現実の特定の側面ではなく、その全体像を描き尽くそうというプランこそが“マンゾーニの”歴史小説の基礎となっていたことを論証したのがこの最終章である。

(論文審査の結果の要旨)

マンゾーニは詩人レオパルディと並んで19世紀のイタリア文学を代表する作家であり、長編小説 *I promessi sposi* は文字通り国民文学として近代イタリアの学校教育においても特別な存在であり続けた。イタリア人でこれを読んでいない者は存在しないと言ってよく、登場人物の中にはその個人名が今やひとつの人物類型として完全に普通名詞化している者が複数おり、文章・文体もまた近代イタリア語の形成にとって言語史的な意味で極めて大きな影響力を行使した。ところが、万人の認めるこうした圧倒的な重要性とは裏腹に、この作品がアカデミックな文学研究の対象とされることは必ずしも多くはなかった。こうした一見奇妙に思われる現象の背後には、この作品の占める特殊な地位があったと考えられる。イタリアの国家統一以来“神聖視”され続けた本作品に批判的検討を加えることには一種の社会的・心理的抵抗があったであろうことは想像に難くない。

本論文は、マンゾーニの駆使した様々な小説技法を取り上げ、それらの詳細な分析を通じて、彼がどのような原則に基づき、どのような効果を得るために、どのような方策を採ったのかを明らかにしたものであり、歴史小説における史実とフィクションの関係について、霜田洋祐氏が修士課程の大学院生時代から一貫して取り組んできたテーマをバラエティに富んだ着眼点を軸に展開したものである。

解明された特徴的な構造の一つは、小説に語られる事実がそこに記されていたとされる「匿名の手稿」なるものの担う役割である。典拠として架空の手稿を設けるという手法は決して珍しいものではないが、この作品にあっては、実在する史料に基づく記述と「匿名の手稿」に依拠する記述とが同一の場面の中で微妙に、しかし細心の注意をもって厳密に区別され、その気になればこの区別を確認しながら読むことにより史実とフィクションが判別できるようになっているのである。しかも、論文第2章においては、こうした独特の技法が作品の推敲プロセスに沿って段階的に整備されていたことが明らかにされており、論証はより確実なものとなっている。

二つ目に取り上げられた創作技法は、一人称複数の代名詞 *noi* の用法に見られるものである。物語の語り手が自分自身を指し示す際の代名詞としては一人称単数の *io* と複数の *noi* の両方が使われており、この点に関しては考察の対象としている先行研究もあるのであるが、霜田氏の調査によって明らかにされたのは、後者 *noi* の中に、聞き手を含む本物の一人称複数と解釈される例が少なからず含まれているという事実である。この発見は、マンゾーニ研究のメッカとも言えるミラノ大学に留学中であった氏の名を本場の研究者の間でも高からしめたものであり、論文第3章においては、この二種類の一人称複数のうち、語り手のみを指す用法が史実の記述に属する部分に大きく偏在していることが定量的に示されている。こうした二種の *noi* を使い分けることにより、マンゾーニは歴史叙述部分とフィクション部分とが読者に対してそれとなく異質な印象を与えるよう工夫を凝らしたものと見られる。

本論文中、最も高く評価されるのは以上二つの発見と論証である。こうして、史実とフィクションを隔てる“ガラスの仕切り”とも言うべき一種の見えない壁が、テキストの内部に設けられていたことが明らかになった。このような角度からのアプローチはイタリア本国においても行われていなかっただけにこの成果は貴重であり、それはまた、文学と歴史の関係についてのマンゾーニの思索がどのようなものであったのかという問題にこれまで以上に深く斬り込んでいく可能性へと繋がっていく。

本論文の残りの章において考察の対象とされているのは、歴史叙述部分の文体的特徴や、聞き手を含む一人称複数の実際の使用例の分析とその結果であるが、どの点に関しても、マンゾーニがこれらの技法を駆使することにより神経症的な拘りをもって史実とフィクションを区別しようとしたことが十分な客観性をもって示されている。

マンゾーニの目指したところが、ある時代のひとつの社会の全体像を描き切ることであったという結論そのものは特に意外性に富んだものではない。同時代の歴史学が支配者側の史料にのみ依拠し、彼らをその主人公とする叙述に留まっていることに彼が不満を抱き、これを補完するものとして歴史小説というジャンルの持つ可能性を追求したというテーゼもまた然りである。しかしながら、彼が自分の小説の読者たちに期待したのは、単純に物語展開を追って楽しむことではなく「歴史の真実」を知ることによる喜びを味わうことであったという事実を、テキスト内部に残された指標に基づいて客観的・定量的に論証した意義は極めて大きい。作品の新たな解釈に結びつく研究成果であり、イタリアにおいても公刊されるに値するものである。

ただし、今後のさらなる研究に期待すべき点を強いて述べるとするならば、本論文によって明らかにされたマンゾーニの特異な文学観や作品の特質に関して、その文学史的・文化史的な位置づけまでが十分に視野に収められているわけではないことが挙げられる。口頭試問に際して、審査委員の一部から、語りの構造の面で論理性に欠ける分析があるのではないかとする指摘があったが、これは『神曲』にも見られる、「登場人物としてのダンテ」の虚構性にも繋がる問題であり、文学史的なパースペクティブの必要性を示すものであろう。本論文の考察の中心は飽くまでもテキストの内部分析にあるが、今後こうしたマンゾーニ文学の独自性が、イタリアという枠を越えて近代ヨーロッパ文学という脈絡の中で捉えられるならば、本研究の意義は一層広範囲な諸分野の研究者から高く評価されることと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年1月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。